

ヤコブ1章 12-27 節 「真理の言葉の適用」

1A 誘惑の欺き 12-18

1B 誘惑の源 12-15

2B 御父による良い贈り物 16-18

2A 御言葉による祝福 19-27

1B 聞いて受け入れる 19-21

2B 実行する 22-27

本文

ヤコブの手紙 1 章を開いてください。私たちは前回、11 節まで学びましたので今日は 12 節から読んでいきたいと思えます。もう一度、前回のおさらいをしたいと思えます。ヤコブの手紙は、エルサレムで迫害が起こり、それによって散らされたユダヤ人信者たちに、牧会者としてヤコブが送った手紙であります。貧しい人も多く、さまざまな試練に遭っている人々が多くいました。そこで、私たちはヘブル書の後半部分で学んだことと同じ、神の訓練とそれに伴う成熟をヤコブ書で学ぶことができることを学びました。

キリスト者として成熟するには、鍵となる教えが「みことばを行なう」ことであります。キリスト者のように語ることはできるのですが、そこから実際に行なうところまでの深みを持たなければいけない、ということです。表面的な信仰ではなく、実質の伴った深みのある信仰に向かって前進しなければいけないことを教えています。そこでヤコブは、彼らの受けている試練こそがその深みを与えるまたとない機会なのだということを教えました。この試練によって忍耐が生まれ、そこで練り清められた品性が培われます。

そして、私たちは試練を受けている時にどうしても恐れて、主が命じられていることを控えてしまう過ちを犯します。そうならないようにヤコブは、惜しみなく知恵を与えてくださる神に求めなさいと勧めました。主が助けてくださいます、折にかなった助けを与えてくださいます。ですから、神の約束をしっかりと握りしめて、疑ってははいけません。信じて求めるのです。それから、貧しい人についてヤコブは話しました。これも一つの試練ですが、けれども高い身分を誇れと言っています。つまり、神の御国に入ることのできる希望が与えられていることを教えました。

1A 誘惑の欺き 12-18

そして本文に入ります。試練についてのまとめを行ないます。

1B 誘惑の源 12-15

1:12 試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束され

た、いのちの冠を受けるからです。

試練に耐える時に、内にある幸いを得ます。ヤコブが3-4節で教えたように、全生活の中で欠けない全き者となっていく、その幸いを得ます。私たちが求めるのは、内なる人の幸せです。エペソ人3章の後半にも、「内なる人が、強められるように」という祈りがありました。

そして、「耐え抜いて良しと認められた」というのは、主イエスが信者のために戻ってこられて、各人に対して称賛を与える時です。主が来られる時まで忍耐します。その時まで忍耐すれば、主が良しと認めてくださいます。それだけではなく、報いも与えてくださいます。「いのちの冠」とありますが、この冠はオリンピックの選手が受け取る冠であり、競走を全うできた者に対して与えられるものです。「いのち」と言っていますが、死の危険にも瀕している試練にいる兄弟にとっては、これは大きな慰めです。殉教者を出しているスミルナの教会に対して、イエス様は、「死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。(黙示 2:10)」と言われました。

1:13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。

ヤコブは、試練から誘惑について話題を変えます。なぜ試練の次に誘惑について話しているかと言いますと、外側の困難はしばしば、内側の葛藤を生み出すからです。苦しみがあれば、内なる人が弱まり、罪を犯しやすくなる、悪に対して脆くなるからです。ヘブル人へ手紙12章においても、神からの訓練の中で、苦みを生じさせることのないように、また俗悪な者となることがないようにという戒めがありました。私たちが今、通読しているヨブ記においても、ヨブは試練の中で、神を呪うというすれすれのところを通っているのを見えています。神は呪っていないのですが、生まれた日を呪っていました。そこでヤコブは、誘惑に打ち勝つための知恵を教えています。

まず必要なことは、誘惑の源をきちんと知ることです。それは神によるものではない、ということです。誘惑するのは悪魔ですが、神は誘惑される方ではありません。神は試練を与える方です。それは、私たちの心が神に投げ頼んだものとなっているか、それを明らかにするためです。学校の先生がテストを出して、学生が十点しか取れなかった時に、十点にしたのは先生ではなく学生です。神は同じように私たちの心を明らかにして、よりご自身に投げ頼むように試練を与えられますが、その試練を機会にして罪を犯した時に、それは神からのものではありません。まず、このことが分からないと、誘惑に打ち勝つことはできません。

1:14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。1:15 欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

ヤコブは、手紙でいろいろな描写で霊的真理を教えています、ここのその一つです。「引かれて、おびき寄せられる」というのは、釣りの餌におびき寄せられる魚の姿であります。それと同じように自分の欲に引かれて、おびき寄せられて、誘惑を受けているということです。誘惑を受けることの発祥は、あくまでも自分の肉体にある欲望からなのだという事です。

そして、私たちは欲が出てきても、それに意志を使って行使しない限り、罪とはなりません。イエス様も、誘惑を受けられました。食欲に訴えた悪魔がいますね。石をパンに変えなさい。神殿の頂から落ちて、天使に助けられて人々の称賛を得る目の欲に、悪魔は訴えました。さらに、世界の栄華を見せてそれをあなたに与えるという悪魔の誘いがありました。イエス様も誘惑を受けられたのです。けれどもイエス様は屈しませんでした。けれども屈する時に罪を犯すのです。

そしてヤコブは罪について、これを母親が妊娠して赤子を産むことに喩えています。欲が孕むと罪を生みます。そして次に作物に実がなり、それが熟することを喩えて、「罪が熟すると死を生む」と言っています。ここで私たちは、罪を認めて、それを告白して、悔い改めて罪を捨てるのであれば、この過程は停止します。キリストの血によって清められて、神との交わりを回復することができます。けれども、そのままにしていれば欲から罪、罪から死へ至るのだということです。

2B 御父による良い贈り物 16-18

1:16 愛する兄弟たち。だまされないようにしなさい。1:17 すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物は上から来るのであって、光を造られた父から下るのです。父には移り変わりや、移り行く影はありません。

ヤコブは、「愛する兄弟たち」と言っています。2 節においても、試練を受けた時はこの上もない喜びとみなしなさい、と言った時に「愛する兄弟たち」と言いました。「だまされないようにしなさい」というヤコブの言葉は、彼の牧会における深い愛情から出てきている戒めであります。

そして、誘惑に打ち勝つのにとても大事な真理があります。それは、「すべての良い贈り物、また、すべての完全な賜物」があるのだということです。私たちが誘惑を受ける時は、それは神が自分に対して試しているのだという錯覚をしますが、そうではないのだとヤコブは正しました。そうではなく、自分の体の欲望から来ていることが分かりました。したがって、神の助けを受ければ打ち勝つことができます。天におられる神は、すべての良い贈り物、完全な賜物を持っておられます。その良きものが上から流れ落ちるのです。ですから、先の 5 節と同じことでもあります。「だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。」主が上からの良い賜物を与えてくださいます。そして、惜しみなく、とがめることなくお与えになることができます。誘惑に打ち勝つ力も与えてくださいます。

そして、「光を造られた父」とありますが、天体のことを考えてみましょう。花火であれば、星よりも

はるかに輝いて光ります。けれどもすぐに消えます。その間、星の光はかき消されましたが、いつまでもそこにあるのです。つまり、変わることなくあるということです。天体の光がそうですから、増してはあらゆる光の源であられる神は、決して移り変わることはありません。そして聖書では、「光」は清さを表しています。ですから、どんなに困難な状況であっても、神はその状況に左右されることなく、折にかなった助けを授けることができる、ということです。

誘惑を受けて、罪を犯してしまう大きな原因の一つは、神の良さを忘れてしまうことです。試練を受けて困難な状況にいる時に、それでも神は良い方であり、完全な方であることを知っているのであれば、情欲に自分の身を委ねて辛さを紛らわそうとするのではなく、神ご自身のその痛みを癒していただくよう、神のところに来ることができます。どんな状況でも神がおられること、これを信じていくのです。

1:18 父はみこころのままに、真理のこばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。

私たちの父は、上から助けを与えられるだけでなく、すでに内にご自身の種を植えてくださっています。「真理のこばをもって私たちをお生みになりました。」とあります。救いに至らせる福音のこばをもって、私たちに神の新しいご性質を与えてくださいました。私たちは、誘惑を受ける時に「信じる前の昔の自分と変わらないではないか。」と誤ってしまいます。いいえ、「だれでもキリストの内にあるならば、新しく造られた者です。」なのです。私たちは罪に対して死んだ者であり、古い人はキリストと共に十字架につけられました。だから、神の種によって生まれたのですから、罪のうちを歩むことはないのです。「だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。(1ヨハネ 3:9)」

そして、「被造物の初穂にする」と言っていますが、これはパウロの言った言葉と同じです。「見よ。古いものは過ぎ去った。すべて新しくなった。」という言葉です。キリストを信じる者を新しく造ってくださった神は、これを初穂として、今度は全世界の刷新を行われます。キリストが再臨される時にそれを行われます。

ですから私たちは、絶えず内なる戦いがありますが、それを勇敢に戦って、最後まで走り続ける必要があります。私たちは誘惑に打ち勝っても、またその後で誘惑がやってきます。その繰り返しです。その時にひるむことなく、また神がそうされているのだと考えるのではなく、むしろ神がその時にも良い賜物を上から与えてくださることを信じるのです。

2A 御言葉による祝福 19-27

そして、キリスト者に対してヤコブは、成熟に向かうための大切な要素を教えます。私たちが新し

く生まれる時には、福音の言葉、真理の言葉によって生まれたのですが、この心に植えつけられた言葉に対して、私たちがしっかりと応答することによって成長します。

1B 聞いて受け入れる 19-21

1:19 愛する兄弟たち。あなたがたはそのことを知っているのです。しかし、だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。

ここの箇所は、しばしば私たちが人と話す時に、相手の話をしっかり聞かなければいけない戒めの言葉として引用されます。話をよく聞くというのは、確かにその通りでしょう。けれども、ここの文脈では、そうではありません。「あなたがたはそのことを知っているのです。」とあります、つまり 18 節にある神の真理のことばについて話しているのです。つまり、神の真理の言葉を、よく心に受け入れなさいという問いをここで行っているのです。

初めにしなければいけないのは、「聞くには早く」であります。神が、そして主なるイエスが語られていることに、そのまま敏感に聞き取っているかどうかであります。イエス様が弟子たちに、わたしは罪人の手に渡されて、十字架につけられて、そして三日目によみがえられると何度も語られました。しかも、はっきりと語られました。ところが弟子たちは、だれがイエスの次に偉くなるのかというような話をしていました。イエス様は、エマオの途上にいた二人の弟子たちに対して、「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。(ルカ 24:25)」と言われました。心が鈍い、聞く耳が遅いのです。主は何度も、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われまし、黙示録においても、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(3:6 等)」と言われました。

次に、「語るにはおそく」とあります。ここで興味深いことを、注解書で読みました。初代教会は、今の説教よりももっと緩やかな形を取っていたそうです。つまり、説教者が御言葉を取り次いでも、その途中で会衆が話をするのが良くあったそうです。そして、ユダヤ人信者の間では語る人に対して、質問したり意見をぶつかけたりすることがあるとか。確かに、ユダヤ教徒は聖書を学ぶ時に、対話形式で学んでいくと聞いています。パウロがローマ書を書いた時に、「ならば、罪を犯してよいということでしょうか。絶対にそんなことはありません。」と言ったりしましたが、あれはユダヤ教のラビが教えるスタイルだということを知ったことがあります。ラビに質問しても、また質問で返されるというようなスタイルです。

しかしヤコブは、そのスタイルを否定している訳ではありませんが、神の言葉に対して早合点して判断する態度を改めなさいということを行っています。ユダヤ人のようにあからさまではないですが、私たちは心の中で絶えず御言葉に聞くよりも語っていないのでしょうか？ 私は、日本の学校では先生が一方向的に話すけれども、アメリカの学校における学生の質問の量に驚いていましたが、そのことを日本にいるアメリカ人宣教師に話すと、「質問の多い奴は、あまり考えてないから、ただ

思いついたことを教師にぶつけているだけだ。」ということでした。そう言われてみれば、なんでこんな単純なことを先生に聞いているのだろうか？と思ったことはあります。

霊的な成熟度はここにあります。語られる御言葉に対して、それを聞いて受け入れるのではなく、絶えず「どうしてだろう」と言って突き返してしまうことはしてないでしょうか？そのため、聖書が言っていることをそのまま受け入れるのではなく、自己流で読んでいこうとすることはないでしょうか？それをヘブル書の著者は、乳ばかり飲んでしていると表現しました。そして御言葉をよく受け入れている人は、堅い食物を食べることができ、良い物と悪い物を見分ける感覚を訓練されている大人になることができるのです。

そして、「怒るにはおそいようにしなさい」とあります。神が語られる言葉をよく聞けない、自分の考えや自分の感情を押し付けていると御言葉に対する怒りが出てきます。神が語られているのに、その事に対して反発します。カンファレンスで語られた、また日曜日の午後に分かち合ってくださいた箴言の言葉がありましたね。「おのれを閉ざす者(直訳:自分を人から分離させる者は)自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいます。愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。(18:1-2)」そして、「人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす。しかもその心は主に向かって激しく怒る。(19:3)」

1:20 人の怒りは、神の義を実現するものではありません。

ここで言っている人の怒りとは、妬みや争いから生じている怒りです。実に、信者たちの間でこのことが起こっているのをヤコブは後で戒めます。「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。(4:1)」このような怒りの愚かさについて、再び箴言にはこう書いてあります。「みことばをさげすむ者は身を滅ぼし、命令を敬う者は報いを受ける。(13:13)」「怒りをおそくする者は英知を増し、気の短い者は愚かさを増す。(14:29)」

私たちは、自分がいつのまにか自分の義の中に陥っていないか、心を見張っている必要があります。神の名を使いながら、実は神の義ではなく自分自身の義に陥っていることです。しばしば言われるのは、「正しいというのが、正しくない。」であります。正しいと言い張ると、そこには柔和さがなくなります。憐れみがなくなります。へりくだりがなくなります。しかし、これらこそが神の義に至るものであり、自分の理解する正しさではないのです。

1:21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

ここに結論が書かれています。すなおに、あるいはへりくだった心で御言葉を受け入れなさい、と

いうことです。そして、御言葉によって炙り出された汚れやあふれる悪があります。これらを捨てながら、みことばを素直に受け入れるのです。「心に植えつけられたみことば」とあります。これは、初めに聞いた福音の御言葉です。御言葉はすでに植えつけられているのですが、それを生活のあらゆる面で生かしていきなさいと言い換えることができるでしょう。

反省と悔い改めは違います。「私は、これこれのことができません。」というのは反省です。悔い改めは、捨て去ることです。ある牧師さんに、たばこをやめたいと相談してきた人がいました。「ならば、シャツのポケットにあるタバコの箱もいらぬですね。」と言って牧師さんは取り上げました。そして駐車場にある彼の車に牧師さんは向かいました。そこには、たばこの箱が何十と入っていました。これを全部、廃棄しますからと言いました。彼は驚きました、激しく抵抗しました。けれども、「たばこ、やめたいんでしょ？」と言うと、「はい、その通りです。」とその兄弟は答えました。それで、それ以来彼は、たばこをやめることができたのです。これだけ単純なことです。「すべての汚れやあふれる悪を捨て去り」、みことばをへりくだって受け入れるのです。

そしてそれを行なうと、「たましいを救うことができます」とあります。これは、これから霊の救いを受けるのではなく、救いの完成を見ることができます、ということです。救われたのですが、キリストが戻ってこられる時に栄光の体に変えられます。その時が来るまで、私たちはみことばを素直に受け入れることによって待っているのです。

2B 実行する 22-27

そして、御言葉を受け入れるだけでは成長はありません。次に御言葉に応答する必要があります。神が命じられているとおりに行なう、実行する必要があります。

1:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。1:23 みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見ると人のようです。1:24 自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようであったかを忘れてしまいます。

みことばを受け入れ、そして応答します。しばしば私たちが誤って考えるのですが、数多くみことばを聞けば、それで自分が霊的に成長すると思っていることです。けれども、ここに書いてあるように、「自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」とありますね。ある方が私に話してくださいました。「今日の説教を聞いただけでも、一週間に、実践しなければいけないことがあまりにも沢山ありますね。」そうなんです、みことばを聞いて、またみことばを聞いて、そしてまたみことばを聞いて、そうやって聞いてはいるけれども、いつまでも学んでいない状態が続きます。なぜなら、御言葉は聞いて、行なうものだからです。

そして聞いているだけで、実行しない人たちのことを、再び分かり易く喩えています。みことばを

「鏡」に喩えています。そして興味深いことに、その鏡を見ているのは男です。「人」と訳されていますが、原語は男です。したがって、ちょうど朝にちょっとだけ顔を見て、その後、自分がどうなっているのか忘れていた男性に似ています。女性であれば、トイレに行った時にどうなっているか気をつけますが、あるいは電車の中でさえ行ないますね。けれども男なら、髪の毛が、寝癖がついているのに全然気づかないことがあります。

これが霊的に起こっています。みことばは聞くのですが、その後でいかにそれが適用できるのかを、具体的に実行できるのかを、知恵を使って考えないのです。「ああ、これは足りないな。」と聞いている時は反省するのです。しかし、それだけなのです。そうすれば、いつまでもいつまでも、霊の成長は望めません。生活の場面で当てはめていくことが必要です。私たちはとかく、みことばを学ぶのに熱心であっても、みことばを実行するのに熱心ではありません。ある人はこう言いました。「聖書に下線を引くけれども、心に下線が引かれていない。」あるいは、このように言った人もいます。「『日本人の英会話』に似ている。知識はあるけれど、失敗を恐れて話そうとしない。」知っているなら、行なうのです。

1:25 ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。

ヤコブは、神の真理の言葉を「完全な律法、すなわち自由の律法」と呼んでいます。これはモーセの律法のことではありません。神の御言葉全般のことです。みことばに留まるならば、みことばは完全で自由を与えるものですから、私たちを変えてくれます。イエス様が言われました。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ 8:31-32)」

イエス様の約束、またヤコブによるこの神の約束を忘れてはいけません。御言葉に取り組み、必ず自由が与えられます。神から命じられていることは、留まること。あるいは一心に見つめて離れないことです。そうすれば、主がその命令に従うことができるための力を御霊によって与えてくださいます。思い出してください、ペテロが水の上を歩きました。ペテロは、イエス様が命じられたらその通りになるという強い信仰を持っていました。だから歩いたのです。けれども、彼は波を見てしまいました。御言葉から目を離してしまったのです、それで沈みかけたのです。けれども、みことばと共に御霊が働いてくださり、力を与えてくださるのです。

1:26 自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなししいものです。1:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。

ヤコブはここから、御言葉を実行することについての具体例を話していきます。言葉や舌についての災いは3章から話し始めます。そして、孤児ややもめたちが困っている時、つまり慈善の行ないについては2章で話し始めます。そして自分をきよく守ることについては、4章で言及しています(4節)。

「舌にくつわをかける」ということですが、これは宗教に熱心であればあるほど陥る欺きであります。自分が御言葉をたくさん学びます。しかし、それをただ学んでいるだけ、聞いているだけで終わらせていくと、知識だけは増えていきます。すると、クリスチャンらしく振る舞うことができるのです。宗教に熱心になれるのです。ところが、実行していないので、その知識を自分の舌によって振りかざすこととなります。そして自分の心の汚れやねたみや怒りなどは、おざなりにされています。そこで意見ばかり、主張ばかりをして、兄弟たちを裁き、争いを引き起こします。御言葉を聞いているだけで行っていないと、むしろその宗教熱心さが教会を駄目にしてしまうのです。

そして、孤児ややもめについては、これは旧約の時代からイスラエルの民に神が命じられていたことであり、キリスト教会においても主が命じておられることであります。これをもっと一般的な形で適用しますと、私たちは聖書を学んだらそれを外に向けて働きかける力としていくことです。それをしないと、学び会や交わりがサロン化していきます。学んでいるのですが、それを、自分の回りにいる人々に仕えるのに用いていないのです。隣にいる人に伝道する、あるいは隣にいる弱まった人に助けの手を差し伸べる、老人にいたる家に訪問する、人々から聞いたことに基づいて祈っていく。ご自分が、今、どこに多くの時間を割いているかそれを点検したらよいでしょう。これも同じです、主から聞いたら動くのです。「自分はきちんと分かっていない……」関係なのです、神は理解することを求めているのではなく、その命令に従って動くことを命じておられるのです！

そして世からの汚れから離れることも同じですね。これは私たちの日常生活の中で、集中砲火のごとく浴びせられています。これらの汚れから守られるには、御言葉の武装をして、それをいつも心に留めて自分自身を清く保ちます。